

中・東欧諸国はアゼルバイジャン産ガスに期待

カスピ海(アゼルバイジャン)から欧州(イタリア)まで 3,200km のガスパイプライン(南ガス回廊:SCP+TANAP+TAP)が繋がった 2020 年末以降、同パイプラインによるアゼルバイジャン産ガスの主な供給先はイタリア(2022 年輸出量 82 億 m^3)、トルコ(同 69 億 m^3)ですが、最近では同国産ガスの中・東欧諸国からの「引き合い」が目立っています。

顕著な例がブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、スロバキアを結ぶガスパイプラインのルートであり、各国はこれを「ソリダリティ(連帯)リング」と呼称し、アゼルバイジャンとの間で「ソリダリティ・リング」を経由した同国産ガスの中・東欧諸国への輸送に関する覚書に署名(本年 4 月)、また「ソリダリティ・リング」の容量を年間 50 億 m^3 に拡大する計画に言及しています。アゼルバイジャンは、既に輸入を開始しているブルガリア、ルーマニアに加え、ハンガリー、スロバキア、モルドバ、セルビア、チェコ、モンテネグロ、アルバニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、北マケドニア、以上10か国からガス調達の打診を受けている旨公表しています。(なお、現在、南ガス回廊の拡張(TANAP:160 億 m^3 →320 億 m^3 、TAP:110 億 m^3 →200 億 m^3)が検討されています。)

このようなアゼルバイジャン産ガスへの需要の高まりがウクライナ情勢を受けたものであることは明白で、とりわけロシア、ウクライナに近接する中・東欧諸国にとってアゼルバイジャン産ガスは「ガス供給を多様化するための最も現実的な解決策」(ハンガリー外務貿易大臣談)であり、その調達確保・拡大が喫緊の課題と認識されているようです。

一方、アゼルバイジャンは自国産ガスへの需要を梃子に、中・東欧諸国と戦略的外交・安全保障関係を築きつつあります。エネルギー資源(石油、ガス、最近は再エネ、水素)を活かし、西側でも東側でもない、第三極・グローバルサウスとしての立ち位置を追求するアゼルバイジャンの外交姿勢が、中・東欧において最も明確に現れているとも言えそうです。

(以上)